

臨地実習における看護学生の内省傾向 - ポートフォリオ導入後の成長報告書の内容分析から -

Content analysis of clinical training reports after the incorporation of portfolio-based learning: Introspection on clinical training among nursing students

李 慧瑛 Hyeyong Lee

鹿児島大学 医学部 保健学科 Kagoshima University

深田 あきみ Akimi Fukada

金沢医療技術専門学校 看護学科 Independent School for Integrative Medical Specialists in Kanazawa

新橋 澄子 Sumiko Shinbashi

金沢医療技術専門学校 看護学科 Independent School for Integrative Medical Specialists in Kanazawa

横山 美江 Yoshie Yokoyama

金沢医療技術専門学校 看護学科 Independent School for Integrative Medical Specialists in Kanazawa

橋本 智美 Satomi Hashimoto

金沢医療技術専門学校 看護学科 Independent School for Integrative Medical Specialists in Kanazawa

下高原 理恵 Rie Shimotakahara

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 Kagoshima University Graduate School Medical and Dental Sciences

西本 大策 Daisaku Nishimoto

鹿児島大学 医学部 保健学科 Kagoshima University

緒方 重光 Shigemitsu Ogata

鹿児島大学 医学部 保健学科 Kagoshima University

2015年8月28日投稿, 2016年2月3日受理

要旨

研究目的は、ポートフォリオを用いた臨地実習における成長報告書の自由記述を内容分析し、学生の内省傾向を明らかにすることである。看護学生72名の自由記述データを計量テキスト分析の手法を用いて、共起ネットワークの作成と対応分析を行った。共起ネットワークの構造分析の結果、「成長ベスト3」「学んだこと」「獲得した力」それぞれの項目で3～5群のカテゴリーが抽出された。振り返りの大切さに気づいた学生が、より高い看護実践能力の向上を目指して努力する内省が読み取れた。対応分析による抽出語の全体的配置において、「獲得した力」が第1成分の寄与率の高いプラス側第1象限に位置しており、「成長ベスト3」と「学んだこと」を区別する基準軸になっていると考えられた。第1成分のプラス側には、「活かす」「力」「今後」の語が並んでおり、学生は応用力を獲得していると考えられる。しかし、それを「成長」としては捉えておらず、「学んだ知識や技術」を「自己の成長」と捉える傾向がある事が示唆された。

Abstract

To investigate introspection among nursing students, we analyzed the content of open-end responses in a report on portfolio-based clinical training. Using a text-mining approach, we constructed co-occurrence networks followed by correspondence analysis of open-ended responses from 72 nursing students. Structural analysis of co-occurrence networks revealed that students who realized the importance of reflection became introspective and began to work toward highly efficient nursing practice. In correspondence analysis, the distribution of extracted words showed that acquired strength was located on the positive side of the first quadrant, contributing greatly to the first principal component and serving as a reference value, separating it from the top 3 areas of growth and learning. The first and fourth quadrants also contained practical application, strength, and future in a nearly straight line, suggesting their involvement in the acquisition of practical nursing skills. The findings of this study also suggest that, on reflection, students tend to consider knowledge and skills they learned as attributable to their own growth unless they give this careful consideration.

キーワード

ポートフォリオ、臨地実習、内省、内容分析

Key words

portfolio, clinical training, introspection, content analysis

1. はじめに

平成23年厚生労働省の看護教育の内容と方法に関する検討会報告書の中で「生活体験の乏しさから、教育を行う上では教員の丁寧な関わりが必要となる一方で、それが学生の主体性や自立性を育ちに大きくしている側面がある。(中略)限られた時間の中で学ぶべき知識が多くなり、カリキュラムが過密になっている。主体的に思考して学ぶ余裕がなく、知識の習得はできたとしても、知識を活用する方法を習得できてないことがある。」と述べられている(厚生労働省 2011)。このような問題を解決し、自ら学び、学んだことを活用していく事のできる人材を育成する教育方法が求められている。

主体的に学ぶためには、内省する力が重要である。内省とは、「振り返り」、「自ら気づく力」である。自分の問題を自ら気づき、それを自ら改善し変化させていく事である(東 2012)。近年、看護学生の内省を促し、主体的に学ぶことを目的とした「ナイチンゲールプロジェクト」と称される学習方法の提言(林 2010)やポートフォリオを活用した報告(糸賀 2010, 箕口・柴田 2015, 坂上 他 2013)が見られるようになった。このような背景のなか、我々も学生の自己教育力の育成を目指し、「主体的に学ぶ力」や「意思ある学び」を獲得できるようにプロジェクト・ベースト・ラーニング(PBL)とポートフォリオを用いた学習を推進している(鈴木 2012)。

とくに、臨地実習は現実的な経験によって、自分なりの考え方と自ら学んでいく力を育てる重要な教育の場である(藤岡 1996)。臨地実習では、具体的な体験を受け、抽象的な概念化、そして能動的な試みへ進めるが、そのための重要なステップとして、内省的な観察が位置づけられている(和栗 2010)。看護教員は学生が体験したことを引き出し、内省を促して次の看護ケアに活かせるように支援する必要がある。そのためにはまず、学生の内省傾向を知る必要がある。本研究目的は、ポ

ートフォリオを用いた臨地実習成長報告書について計量テキスト分析を行い、学生の内省傾向を明らかにすることである。

2. 研究方法

2.1 研究対象

A看護専門学校3年生 84名

2.2 研究期間

2014年4月～2015年6月

2.3 対象者の背景

A看護専門学校のカリキュラムは、PBLを主軸として構成されている。また、「プロジェクト」とは、ビジョンや使命感に基づき、ある目的(ゴール)を果たすための構想や計画などを指し、PBLとは、プロジェクトの特徴やセオリーを学習に活かしたものである。これは、ゴールに至るプロセスに「準備」→「ビジョン・ゴール」→「計画」→「情報・解決策」→「制作」→「プレゼンテーション」→「再構築」→「成長確認」という明解なフェーズ(段階)を持っている(鈴木 2012)。対象者は1年次からPBLを開始しており、そのテーマは学年進行に伴い、自分の健康、周囲の人々の健康、社会の人々の健康と視点を広げて学ぶよう設定している。各PBLでは、ポートフォリオを作成し、自己理解・自己評価のツールとして用いている。今回の研究対象者は、3年次の4月から開始する臨地実習を経験した学生である。臨地実習もPBL学習の枠組みで、ポートフォリオを使用しながら実践している。

またA看護専門学校の特徴として、2013年度から経験型実習を導入したことが挙げられる。経験型実習では、看護師と共に行動し、担当看護師が受け持っている患者への看護を一緒に実践する。学生は、看護師と共に行動し、「看護場面の優先順位はどのように決められているのか?」、「コ・メディカルといかに関わっているのか?」、「患者とのコミュニケーションにどのようなスキルを使っているのか?」等について実践から学ぶ。

2.4 ポートフォリオ学習の概要

ポートフォリオには、まずそのPBL（もしくは実習）における自らの目標を明確にするために、ビジョンゴールシートを記入する。ビジョンゴールシートには、PBLや実習における「願い」とそれを実現するための具体的な「目標」が記載される。その後、その目標達成に向けて集めた資料や実習記録、自身の成果物を時間経過の順にファイリングしていく。あわせて、自己学習内容の整理や日々の振り返りは、1つのノートに記載し、リフレクションノートとして用いている。このノートも最後にはポートフォリオに綴じる。

PBLや実習終了後は、このポートフォリオをもとに凝縮ポートフォリオを作成し、発表を行う。発表時に他者からフィードバックされた内容についてもポートフォリオに綴じていく。また、この学習における自己の「成長報告書」を記載し、当該PBLにおける自己評価を行う。成長報告書の質問項目は、あなたの「1. 成長ベスト3は何ですか？」（以下「成長ベスト3」）、「2. 学んだことは何ですか？」（以下「学んだこと」）、「3. 獲得した力は何ですか？」（以下「獲得した力」）である。このようにポートフォリオは、自分のやったことを俯瞰し評価する姿勢を持つことを狙いとしている。また、指導者が学生の獲得した知識、技術、思考や問題解決プロセスなどを把握し、具体的な支援、評価を実践していく事も可能にする。

2.5 データ収集方法と調査内容

2015年6月各領域の臨地実習終了時点、自由記述式の成長報告書を学生に配布・記入後にその場で回収した。

2.6 データ分析方法

収集したデータは、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である（樋口 2014）。これは、大量のテキストデータを全体やクラスターごとにまとめ、短い言葉でその傾向や特長や重要語、キーワードを抽出し、その出現頻度や同時出現関係等を分析できる研究手法である。コンピュータプログラムによって、形態素解析（言葉で意味のある最小単位に分けて、品詞を判別する解析）を行い、単語の出現頻度や語と語の結びつ

きを統計的に分析する。その結果と、素データの特徴や語と語の結びつきを確認して、コーディングを行った。

手順としては、未加工データをExcelに入力して、成長報告書の電子テキスト化を行った。分析にはKH Coder (ver. 2.00)を用いた。これは、計量テキスト分析を行うために開発されたフリーソフトウェアである。

本研究では、KH Coderを使用し、構造化されていないテキストデータの1) 形態素解析、2) 5回以上の頻出語の抽出、3) 「成長ベスト3」「学んだこと」「獲得した力」についての共起ネットワーク（サブグラフ検出 / modularity）の作成、4) サブグラフについて意味内容が類似したものをグループ化し、共通の意味を表すカテゴリーに分類、5) 成長報告書の全文章を合算した対応分析を実施した。尚、あまりに多くの抽出語が1つの共起ネットワーク上や対応分析時に存在すると判別が難しくなるため、出現語数の条件を5語以上とした。また、4)の手順では、分析を質的帰納的に行なうために、成長報告書に書かれた素データを繰り返し読み、全体を理解した。分析の全過程を通じて、解釈が先入観に捉われていないか、内容の妥当性を欠いていないかについて、研究者間で確認・照合して分析の厳密性の確保に努めた。

2.7 倫理的配慮

すべての手続きは、学内の倫理委員会の承認を得て行なった。対象学生には、研究参加や途中辞退は自由意志であること、研究の目的と方法、評価とは無関係であり、不参加であっても不利益を被らないこと、データ分析は匿名で行いプライバシーを厳守することを書面及び口頭で説明した。成長報告書を調査に使用することについては、書面にて同意を得た。

3. 結果

回収率は89.3% (75名)、有効回答率は85.7% (72名)。対象者の平均年齢は20.7 (± 2.98) 歳、男性18.1% (13名)、女性81.9% (59名)であった。

3.1 成長報告書の上位150の頻出語

「成長ベスト3」の自由記述成長報告書のテキストデータは、文章数414、総抽出語数2,848語、分析対象語数1,222語であり、異なり語数490語、

分析対象異なり語数375語であった。「学んだこと」は、文章数183、総抽出語数2,661語、分析対象語数1,067語であり、異なり語数509語、分析対象異なり語数376語であった。「獲得した力」は、文章数183、総抽出語数2,431語、分析対象語数985語であり、異なり語数503語、分析対象語数365語であった。表1に、3つの質問項目それぞれについて、出現回数5回以上の抽出語をまとめた。

3.2 共起ネットワークの作成

共起ネットワークとは、抽出語またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図、すなわち共起関係を線で表したネットワーク図である。布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかということに意味がある。円の大小が出現回数を反映し、線の太さは共起関係の強さを表している。

3.2.1 成長ベスト3は何ですか？

共起ネットワーク(中心性)の構造は、「患者」「自分」「振り返る」「看護」が中心軸となり、他との結節点となっていた。主な結びつきとしては「患者-看護-援助-対象-理解-疾患」、「自分-振り返る-実習-ポートフォリオ-学習」、「記録-整理-情報-必要-出来る-文章」が見られた。「自分」は「振り返る」「考える」とそれぞれ強い結びつきであることから、それぞれのカテゴリーの構成語句として含めた。「学び-目標」は、出現回数が少なく、他の語句との結びつきがないこと、また、素データを見ても特徴となる傾向が見られず、カテゴリーに含めなかった。その結果、5つのカテゴリーで構成されたサブグラフが検出された(図1)。

3.2.2 学んだことは何ですか？

「成長ベスト3」と同様に頻出語は、「自分」「患者」「振り返る」であり、結びつきは「患者-理解-対象-観察」、「自分-実習-振り返る-学ぶ」、「情報-行動-整理」であった。4つのカテゴリーで構成されたサブグラフが見出された(図2)。

3.2.3 獲得した力は何ですか？

出現数が多い「患者」「実習」「活かす」「看護」「思う」を中心として「患者-思う-今後-力-必要」、「実習-次-活かす-自分-考える-看護」の結びつきが見られ、3つのカテゴリーで構成されたサブグラフが見出された(図3)。

3.2.4 自由記述内容のカテゴリー名と共起語

共起ネットワークの構造に基づいて抽出された各カテゴリーに、特徴を表すネーミングを行った。

「成長ベスト3」は、語句の結びつきから、《看護援助》、《振り返り》、《論理的思考》、《情報整理》、《コミュニケーション》の5群に分けられた。「患者、看護、行う、学ぶ、知る、大切、援助、対象、理解、疾患、分かる」の共起語から成るカテゴリーでは、「受け持った患者への看護を振り返ることが出来た」「対象の個別性を踏まえた援助を実施することができた」などの内容が見られ、看護援助の実際や重要性についての記述と判断し、《看護援助》と命名した。

次に、「振り返る、実習、今、ポートフォリオ、自分、もう一度」の共起語を特徴とするカテゴリーでは、「今までの実習を振り返りあの場面ではこうすれば良かった、と気づくことができた」「行きづまったら今までのポートフォリオを振り返る」「振り返ることによって自分なりに反省点を見つけることが出来るようになった」などの内容があり、学生が振り返り、学びを得ることを自己の成長と捉えていることから、《振り返り》と名付けた。

「学んだこと」において、出現数が多かった語句は「患者」、「学ぶ」、「自分」、「振り返る」であった。《個別性を考えた看護》、《リフレクションの重要性》、《情報収集・整理の重要性》、《人間関係構築の重要性》の4群に分けられた。出現回数の多かった「振り返る」は、「学ぶ、行う、援助、次、ポートフォリオ、思う、自分、実習、看護」と共起しており、具体的な記述内容に、「振り返ることで次へ繋がることを学んだ」「ポートフォリオ学習で実習を振り返ることを学んだ」などが見られたことから、このカテゴリーを《リフレクションの重要性》とした。

「獲得した力」の共起ネットワークの中心は「患者」、「活かす」、「コミュニケーション」であった。《対象のニーズに沿った看護を実践する力》、《次に活かす力》、《対象を俯瞰する力》の3群に分類した。

「成長ベスト3」、「学んだこと」、「獲得した力」、それぞれのカテゴリーの共起語と代表的な自由記述については表2に整理した。

表1. 成長報告書の上位150の頻出語(5語以上)

成長ベスト3		学んだこと		獲得した力	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	41	自分	31	患者	39
自分	36	患者	30	実習	25
振り返る	32	振り返る	30	活かす	19
コミュニケーション	25	学ぶ	27	看護	19
看護	24	実習	21	思う	19
実習	20	看護	18	援助	18
考える	18	大切	14	自分	18
理解	15	理解	13	コミュニケーション	16
整理	13	行う	12	振り返る	16
援助	12	思う	12	次	15
疾患	12	コミュニケーション	11	考える	11
分かる	12	学習	11	今後	11
対象	11	疾患	10	行う	10
大切	11	整理	10	力	10
学ぶ	10	考える	9	情報	8
学習	10	次	9	人	8
記録	10	情報	9	整理	7
次	10	目標	8	全体	7
関わり	9	今	7	対象	7
情報	9	対象	7	大切	7
行う	8	記録	6	把握	7
今	8	出来る	6	関わり	6
言語	7	知る	6	個別	6
行動	7	援助	5	必要	6
能力	7	観察	5	問題	6
文章	7	気づく	5	学ぶ	5
課題	6	行動	5	学習	5
指導	6	成長	5	見る	5
相手	6	評価	5	考え	5
知る	6			指導	5
もう一度	5			自身	5
学び	5			出来る	5
見る	5			食事	5
出来る	5			能力	5
少し	5			理解	5
積極	5				
必要	5				
目標	5				

各項目の分析対象語数 「成長ベスト3」は375語、「学んだこと」は376語、「獲得した力」は365語であった

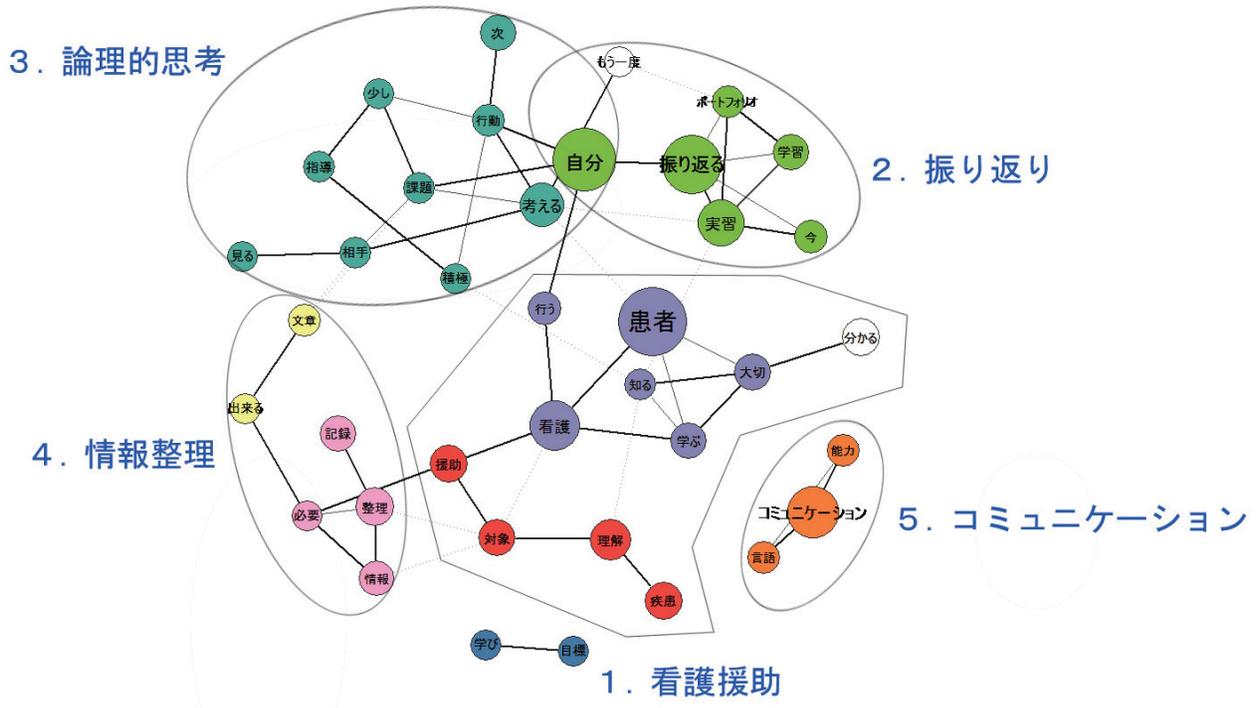


図1. 成長ベスト3

4. 人間関係構築の重要性

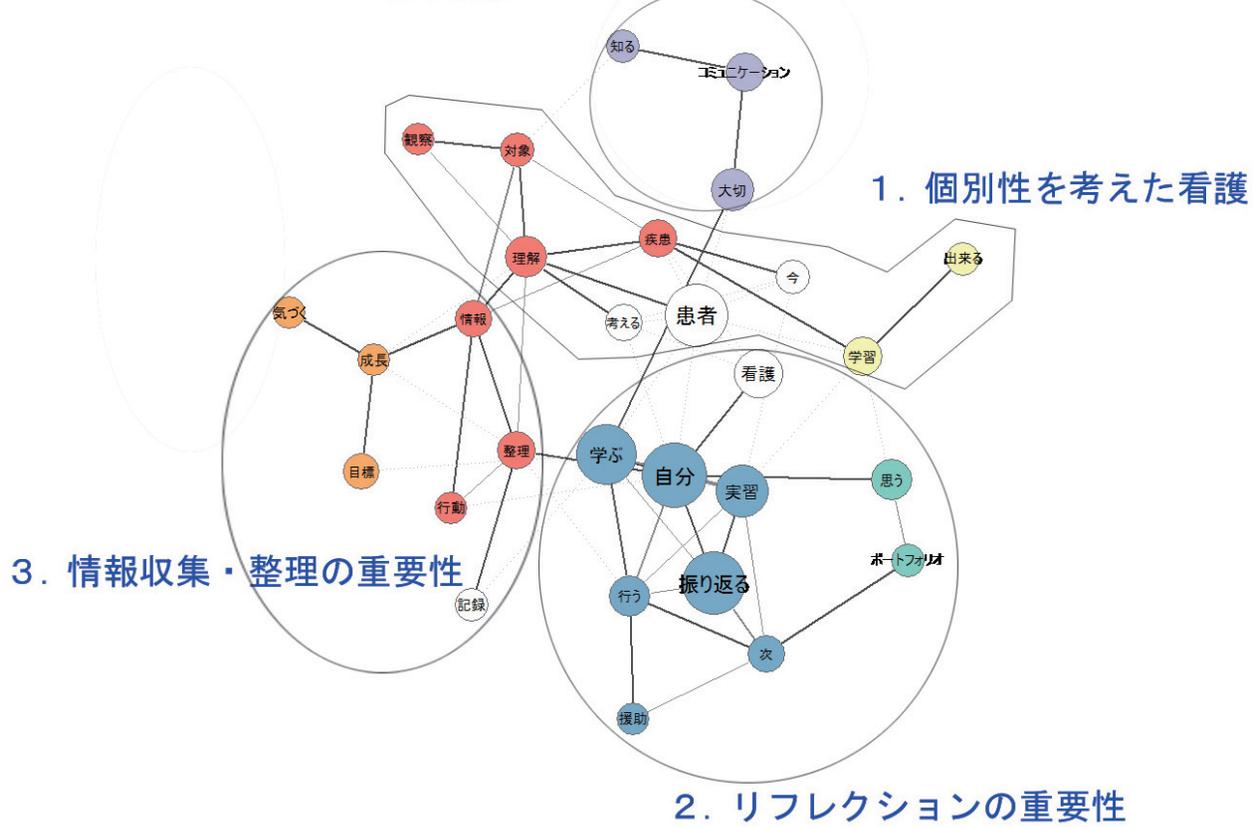
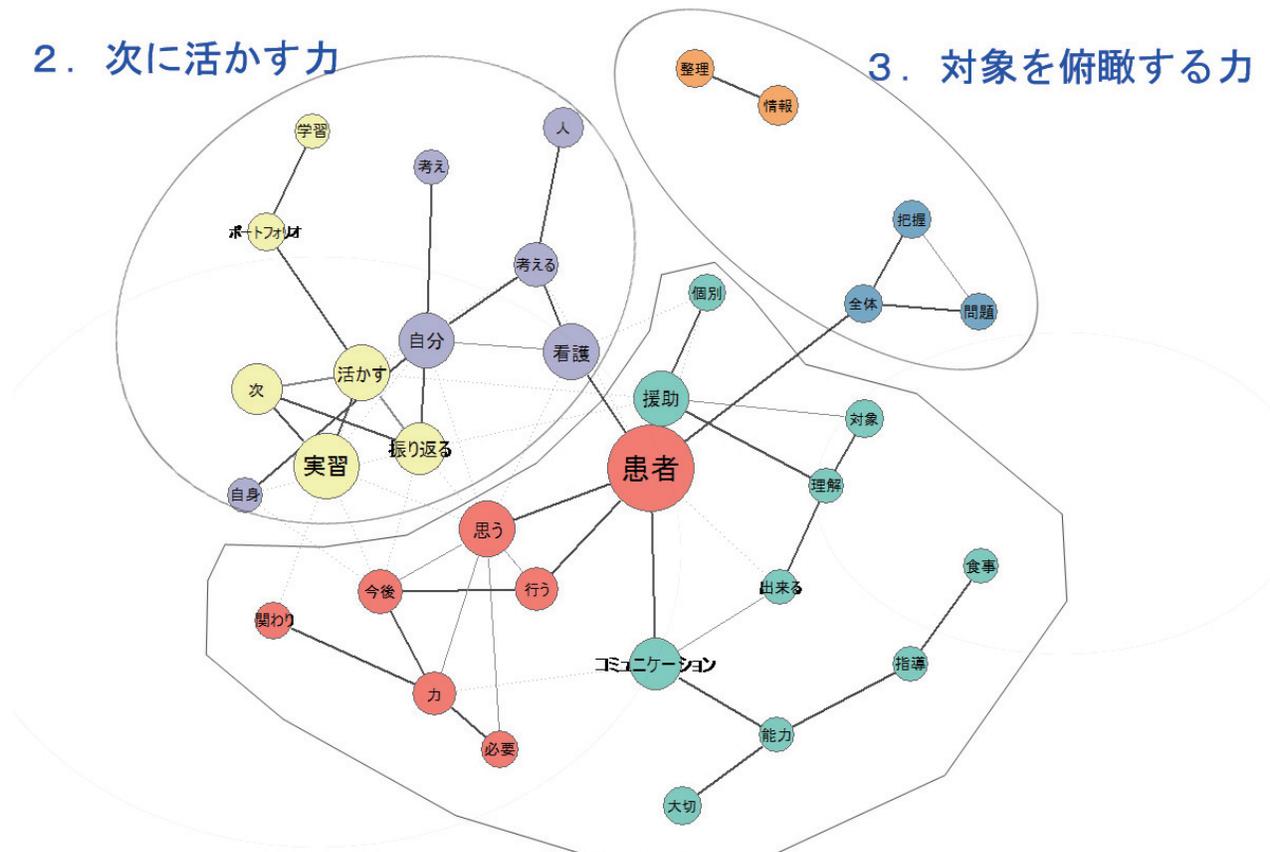


図2. 学んだこと

2. 次に活かす力

3. 対象を俯瞰する力



1. 対象のニーズに沿った看護を実践する力

図3. 獲得した力

3.3 成長報告書の対応分析

成長報告書に記入された全文章780、分析対象語3,274語を合わせて、対応分析を行った。対応分析では、語の相関関係が高いほど、近くにプロットされる。したがって近くにプロットされている頻出語を確認していくことで、学生の内省傾向の特徴がつかめる。頻出語の分布からは、「獲得した力」「成長ベスト3」「学んだこと」の視点から一定の傾向がみられた(図4)。抽出語の全体的布置において、「獲得した力」は第1成分の寄与率の高いプラス側第1象限に、「成長ベスト3」と「学んだこと」は第1成分のマイナス側第2象限、第3象限に位置していた。第一成分に強く寄与する因子としては、「力・活かす・今後」が抽出された。

4. 考察

4.1 成長報告書の頻出語の分析

「成長ベスト3」と「学んだこと」の上位3位までの語は、「患者」「自分」「振り返る」であった。具

体的には「振り返ることによって、自分なりに反省点を見つけることができるようになった。」「患者情報の整理により、看護実践内容を反省できた。」等が散見され、導入したポートフォリオを用いた学習、リフレクションノートによって、学生の行動様式として内省の習慣が定着されつつあると考えられる。一方、「獲得した力」の上位3位は、「患者」「実習」「活かす」であった。自由記述では「振り返ること、自分のケアを顧みて次へ繋げる。」という主旨の記述が多く、実践した看護や得た専門知識を内省したのち、そこでの気づきを次の看護実践に繋げようとする姿勢が見られた。

中村ら(2014)は、ポートフォリオによって、学生は学習を振り返り、自分を見つめ直し自己の課題を発見する機会を得るなど、作成から発表までに学び、喜び、達成感を持つという経験をしていると述べている。そして、この経験自体が次の教育を導き出す新たな力に繋がるとしている。「振り返り、次につなげる事が出来た」という体験そ

表2. 自由記述内容のカテゴリー名と共起語

群	カテゴリー名	共起した語	自由記述 (抜粋)
成長ベスト3	1 看護援助	患者, 看護, 行う, 学ぶ, 知る, 大切, 援助, 対象, 理解, 疾患, 分かる	「受け持った患者への看護を振り返ることが出来た」「疾患を理解し患者の体の中で何が起っているのかを知ることが大切だと学んだ」「対象の個性を踏まえた援助を実施することができた」
	2 振り返り	振り返る, 実習, 今, ポートフォリオ, 学習, 自分, もう一度	「今までの実習を振り返りあの場面ではこうすれば良かった、と気づくことができた」「行きづまったら今までのポートフォリオを振り返る」「疾患についてももう一度振り返りができた」「振り返ることによって自分なりに反省点を見つけることができるようになった」「疾患について再度振り返りをすることができた」
	3 論理的思考	見る, 相手, 考える, 行動, 次, 課題, 少し, 指導, 積極, 自分	「相手の表情を見ながらコミュニケーションがとれるようになった」「自分の行動を振り返り次に繋げることができるようになった」「患者のことについてもう一度考えることができた」「自分の課題を見つけ解決していく力の向上」「積極的に指導者や教員に報告連絡相談ができた」「振り返りから自分のできている部分と課題が少しずつ分かるようになった」
	4 情報整理	記録, 整理, 情報, 必要, 出来る, 文章	「記録物の整理ができるようになった」「必要な情報がとれるようになった」「簡潔に文章をまとめて記録ができるようになった」
	5 コミュニケーション	言語, コミュニケーション, 能力	「言語的コミュニケーションだけでなく非言語的コミュニケーションの重要性に気づいた」「非言語的コミュニケーション能力の大切さが分かった」
学んだこと	1 個別性を考えた看護	出来る, 学習, 今, 疾患, 理解, 対象, 観察, 考える, 患者	「コミュニケーションは会話だけではなく患者の心理面が伝わることを知ることが出来た」「自己学習は疾患を理解するだけでなく、今患者はどういった状態でどの段階にいる、と疾患に関連させて学習していくことを学んだ」
	2 リフレクションの重要性	学ぶ, 行う, 援助, 次, ポートフォリオ, 思う, 自分, 振り返る, 実習, 看護	「実習後に振り返ることができる」「振り返ることで次へ繋がることを学んだ」「ポートフォリオ学習で実習を振り返ることを学んだ」「看護計画・ケア・評価・リフレクションを行い次の看護につなげていくことを学んだ」「患者を考えるためには観察を通した対象理解が必要だと分かった」
	3 情報収集・整理の重要性	情報, 整理, 行動, 成長, 目標, 気づく, 記録	「患者情報の整理により看護実践内容を反省できた」「自分の記録物をまとめて情報整理することを学んだ」「具体的に振り返ることが苦手だと気づき成長へは報告連絡相談が大事である」「情報を整理することで行動すべきことや目標とのずれがスムーズに分かる」
	4 人間関係構築の重要性	知る, コミュニケーション, 大切	「場面に応じたコミュニケーションを知り大切さを学ぶことができた」「コミュニケーションや情報収集を通して対象の全体像を理解する大切さを学んだ」
獲得した力	1 対象のニーズに沿った看護を実践する力	患者, 思う, 行う, 今後, 力, 必要, 関わり, コミュニケーション, 能力, 大切, 指導, 食事, 援助, 個別, 理解, 出来る, 対象	「何度も振り返り自分の行った援助や関わりについて考えを深める力がついた」「コミュニケーションを工夫する能力が必要だと学んだ」「食事指導に関連させて他の指導を行う技術を学んだ」「声かけや促すことの大切さを学んだ」「患者さんの立場になって物事を考えようと思った」「何度も振り返り自分の行った援助や関わりについて考えを深める力がついた」「まとめる力がつき今後もポートフォリオを行う時に役立つ」「今後も毎日の実習を振り返ることで自分を見つめ直し次につなげたい」
	2 次に活かす力	看護, 考える, 人, 自分, 考え, 振り返る, 次, 実習, 活かす, 自身, ポートフォリオ, 学習	「今までの実習を振り返り次の実習に活かせるように心がけたい」「振り返ることを学習した」「次回に活かすために原因を考えて分析した」「ポートフォリオを作ることで次の実習に活かすことができる」「振り返ることで自分のケアを顧みて次へ繋げる」「失敗を次回に活かすために原因を考えるようになった」
	3 対象を俯瞰する力	情報, 整理, 全体, 把握, 問題	「ポートフォリオ学習をすることで情報整理ができ対象の理解が深まる」「患者さんの全体像を把握することで看護問題を抽出できる」

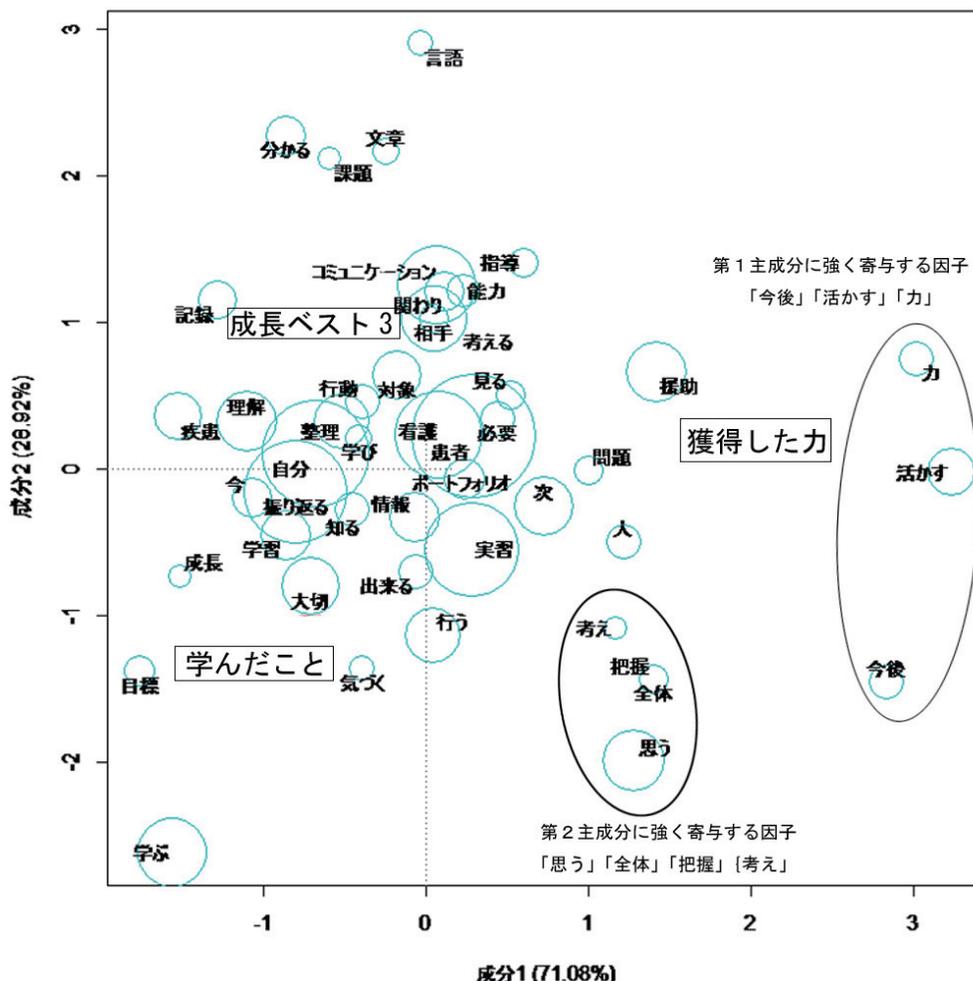


図4. 成長報告書の対応分析

のものが、学生が主体的に学ぶ意欲の向上に繋がると言える。

4.2 各共起ネットワークの構造分析

4.2.1 「成長ベスト3」の構造

構造と語句の結びつきによって、学生自身が成長したと感じる内容は、《看護援助》、《振り返り》、《論理的思考》、《情報整理》、《コミュニケーション》の5群に分けられた。《看護援助》は、対象の個別性を踏まえること、疾患を理解し対象の状態を知ることなどが記載されており、自ら「看護とは何か」と自問自答しながら成長していることが伺えた。また、カテゴリーの記述内容から各カテゴリーの関係性を見ると、《振り返り》から、自らの課題や対象の看護問題を抽出し、《情報整理》して、客観的に評価することで《論理的思考》が育成されているのではないかと考えられた。これは、PBL

終了時に、課題に対する具体的な解決策を自己の体験や学習内容を根拠として発表することで、自分の得た知識を統合しているものと考えられる。そして、《コミュニケーション》では、非言語的コミュニケーションについて多く書かれており、言葉だけでなく、五感を使って観察し対象を理解できるようになったと推察できた。

平成20年中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」の答申において、知識の活用や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことの必要性が示され、とりわけ各専攻分野を通じて培う学士力として論理的思考および問題解決力が挙げられている(船木・塚本2012)。今回の対象は専門学校生ではあるが、今後、看護師という専門職に就くにあたり、同様のスキルは必須である。以上から、ポートフォリオを用いた学習を導入することは、論理的思考や問題解決力を育む一助と

なると考えられる。

4.2.2「学んだこと」の構造

結びつきの強さと配置によって、学んだ内容を、《個別性を考えた看護》、《リフレクションの重要性》、《情報収集・整理の重要性》、《人間関係構築の重要性》の4群に分けた。

杉浦らは、PBLとポートフォリオを用いた授業において学生は「課題発見力」と「課題解決力」を学んだと言っている（杉浦・新美 2014）。本研究で抽出された《情報収集・整理の重要性》は、共起した語の関係内容から「課題発見力」と捉えれば、《個別性を考えた看護》、《リフレクションの重要性》は、「課題解決力」に繋がる。これは、鈴木（2012）がプロジェクト学習で身につくとしている力とも合致しており、看護を提供していく上で、非常に重要な力を学生は学んでいる。

4.2.3「獲得した力」の構造

全体を構成する諸語の互いの位置関係から、獲得した力を、《対象のニーズに沿った看護を実践する力》、《次に活かす力》、《対象を俯瞰する力》の3群に分類した。

松谷ら（2010）は、看護実践能力の3つの主要能力構造として、「人々中心のケアを実践する力」、「看護の質を改善する力」、「人々を理解する力」を示している。今回の調査で明らかになった3つのカテゴリーを見ると、《対象のニーズに沿った看護を実践する力》は「人々中心のケアを実践する力」、《次に活かす力》は「看護の質を改善する力」、《対象を俯瞰する力》は「人々を理解する力」と読み替えることができる。つまり、ポートフォリオを活用した臨地実習において、獲得した力は看護実践能力の主要能力を網羅している。

4.2.4 基礎データとしてのカテゴリー名と共起語

共起語のつながりやカテゴリー分類を総括すると、「成長ベスト3」と「学んだこと」では、学生は思考や看護実践過程を自分なりに俯瞰することによって、成長や学びを認識していた。自由記述には「今までの実習を振り返りあの場面ではこうすれば良かった、と気づくことができた。」「受け持った患者への看護を振り返ることができた。」等があった。「獲得した力」では自由記述に「今後も毎日の実習を振り返ることで自分自身を見つめ直し次につなげたい。」「失敗を次回に活かすために、

原因を考えるようになった。」等が見られる。つまり、学生は専門知識の習得だけでなく、それらを活かし具体的な行動につなげようとしていることが推し量れる。

鈴木（2012）は、「身につく力」について、全体をあらためて俯瞰し、自分の価値ある変化・変容を確認するとともに、自信や自尊感情を身につけ次へのモチベーションを高めると述べている。また、大関（2000）は、看護教育において「自己評価や目標設定などポートフォリオを利用した自己啓発が有用である。」と報告している。本研究では、ポートフォリオによる学習を体験した学生は、臨地実習全体を振り返り、自分自身を見つめなおすとともに「次につなげたい」「次回に活かす」など具体的な行動につなげようとする特徴が多く見られた。そして、学生がそれを「獲得した力」と捉えていることが分かる。このことは、「自分の価値ある変化・変容を確認する」ことであり、成長報告書で振り返ることは自信や自尊感情と繋がる。

4.3 対応分析

抽出語の全体的布置において、「獲得した力」は第1成分の寄与率の高いプラス側第1象限に、「成長ベスト3」と「学んだこと」は第1成分のマイナス側第2象限、第3象限に位置している。要するに、第1成分は「獲得した力」と他の2群を区別する基準軸になっていると判断される。

第1成分のプラス側に着目すると、「活かす」「力」「今後」の語がある。具体的な回答として「今までの実習を振り返り、次の実習に活かせるように心がけたい。」「何度も振り返り自分の行った援助や関わりについて考えを深める力がついた。」「まとめる力がつき今後もポートフォリオを行う時に役立つ。」等、学んだ知識や技術を将来に活かす事柄を表している。従って、第1成分は、「看護実践能力の獲得」に関係していると推察される。

第1成分のマイナス側では、「目標」「学ぶ」等が見られる。実際の回答として「情報を整理することで行動すべきことや目標とのずれがスムーズに分かる。」「患者を考えるためには観察を通じた対象理解が必要だと分かった。」等があり、学んだことを確認する内容を含んでいる。また、第1成分の左右の位置関係に着眼すると、「学んだこと」と「成長ベスト3」は非常に近い位置に布置されて

おり、自由記述の内容が酷似していることを示している。つまり学生は、「学んだ知識や技術(実習で体験したこと)」を「自己の成長」と捉える傾向がある。しかし、共起語の内容分析結果においては、「獲得した力」として「次に活かす」という内容が多く見られる。学生は応用力を獲得しているにもかかわらず、それを「成長」としては捉えていないようである。このことは、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書の「知識の習得はできたとしても、知識を活用する方法を習得できてないことがある。」という指摘と一致する(厚生労働省2011)。これを踏まえて、看護教員は「次に活かす力」こそが「成長」であると認識し、学生へは継続して学んでいくことが大切である事を指導していく必要がある。

第2成分のプラス側の値2~3にわたって、「言語」「課題」「分かる」「文章」が布置している。自由記載として「非言語的コミュニケーション能力の大切さが分かった。」「振り返りから自分のできている部分と課題が少しずつ分かるようになった。」「簡潔に文章をまとめて記録ができるようになった。」等、成長の自覚を示す言葉が多く見られる。第2成分のマイナス側の値-2~-3にかけて、「学ぶ」「思う」が見られる。自由記述として「ポートフォリオ学習で実習を振り返ることを学んだ。」「患者さんの立場になって物事を考えようと思った。」等、成長のきっかけとなる知識や方法を指している。それ故に、第2成分は、「成長の認識」を表していると考えられる。以上から対応分析による抽出語のポジショニングの確認により、「看護実践能力の獲得」と「成長の認識」という2つの軸があることが見出せた。

このことから、臨地実習でポートフォリオを活用することは、看護実践能力のみならず、自己の成長を自覚すると思われる。これまで臨地実習では、看護過程が重視される傾向があり、看護の全体性や関係性が見失われるという問題があった(芥川・勝山2007)。しかし、ポートフォリオ学習は、これらが可視化されるため(安川2010)、学生と教員・指導者が、知識や技術だけでなく、意欲や態度を評価できる方法であると考えられる。

4.4 研究の限界と今後の課題

本調査では、対象数が限られ、3年生だけの自

由記述式アンケートであったため学年間の継続的な評価がなされていない。また、学生の生活背景などの影響要因や、ポートフォリオの指導方法についても学生個々で異なる可能性がある。従って、学年進行による変化を捉えるためには、学生への継続した調査が必要である。さらに、今後はポートフォリオ学習に影響する教員の教育内容などについても調査していきたい。

5. 結論

本稿では、実習でポートフォリオを経験した学生の内省傾向について探索的に調査し、以下の3点が明らかになった。

- 1) 共起ネットワークの構造分析の結果から、「成長ベスト3」「学んだこと」「獲得した力」それぞれの項目で3~5群のカテゴリーが抽出された。振り返りの大切さに気づいた学生が、より高い看護実践能力の向上を目指して努力する内省が読み取れた。
- 2) ポートフォリオでは思考過程が可視化されるので、看護実践内容を自ら俯瞰することで成長や学びを認識でき、自分の価値ある変化・変容を確認することができる。
- 3) 対応分析の結果から、学生は応用力を獲得しているが、それを「成長」としては捉えておらず、「学んだ知識や技術」を「自己の成長」と捉える傾向がある事が示唆された。

引用文献

芥川清香, 勝山吉章(2007). 看護学実習における経験型実習教育の検討 -学生の安全意識を高めるための教育実践報告から-. 福岡大学人文論叢 39(2), 309-325.

藤岡完治(1996). 臨地実習教育の授業としての成立. 看護教育 37(2), 94-101.

船木由香, 塚本尚子(2012). 看護教育におけるクリティカルシンキング研究の動向 -国内文献について-. 聖母大学紀要 9, 63-70.

林美栄子(2010). ポートフォリオで評価する「看護実践の基礎」ナイチンゲールプロジェクト支援から. 看護教育 51(2), 106-111.

東めぐみ(2012). 看護リフレクション入門 経験か

ら学び新たな看護を創造する。ライフサポート社、横浜。

樋口耕一(2014). 社会調査のための計量テキスト分析 -内容分析の警鐘と発展を目指して-, p15. ナカニシヤ出版, 京都.

糸賀暢子(2010). プロジェクト学習・ポートフォリオ評価で学生に身につく力「学ぶ楽しさ, 嬉しさ」を実感する教育への転換. 看護教育51(2), 116-121.

厚生労働省(2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>

松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子 他(2010). 看護実践能力: 概念, 構造, および評価. 聖路加看護学会誌14(2), 18-28.

箕口ゆう子, 柴田美恵子(2015). ポートフォリオとルーブリック・リフレクションを用いた実習の自己教育力育成への影響 -基礎看護学実習後の学生の自己評価と自己教育力測定尺度から. 日本看護学会論文集看護教育45, 67-70.

中村美幸, 塚本都子, 森田孝子(2014). 看護基礎教育におけるパーソナルポートフォリオ活用に対する学生の反応. 看護教育研究学会誌6(1), 25-32.

大関信子(2000). 看護教育にポートフォリオの導入を. Quality Nursing 6(3), 236-252.

坂上明子, 谷本真理子, 増島麻里子 他(2013). 看護実践能力自己評価ポートフォリオの改訂に向けた取り組み. 千葉大学大学院看護学研究科紀要35, 15-20.

杉浦暁代, 新美綾子(2014). プロジェクト学習を用いた成人看護学概論の学習により学生が認識した学びと成長 -テキストマイニングによる分析. 日本看護学会論文集看護教育44, 3-6.

鈴木敏恵(2012). 課題解決力と論理的思考が身につくプロジェクト学習の基本と手法, pp18-31, pp70-71. 教育出版, 東京.

和栗百恵(2010). 「ふりかえり」と学習 -大学教育

におけるふりかえり支援のために-. 国立教育政策研究所紀要139, 85-100.

安川仁子(2010). 看護教員のポートフォリオ評価の認識 教員養成課程修了者の調査から. 看護教育51(2), 102-105.



著者連絡先

〒890-8544

鹿児島市桜ヶ丘8丁目35番1号

鹿児島大学 医学部 保健学科

李 慧瑛

riheyon@health.nop.kagoshima-u.ac.jp